

## 障害の重い子供の教育実践からみた動作法

著者	進 一鷹
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	39
ページ	223-230
発行年	1990-09-30
その他の言語のタイトル	Dousa-Ho in terms of Education for Multiple Handicapped Children
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/945">http://hdl.handle.net/2298/945</a>

## 障害の重い子供の教育実践からみた動作法

進 一 鷹

“Dousa-Ho” in terms of Education for Multiple Handicapped Children

Kazutaka SHIN

### 問 題

動き回る，視線があわない，物に固執するなどの症状を有する自閉症児に対して，動作法を適用することによって大きな成果が得られているという報告がある．例えば，「心理リハビリテーションの展開－精神の発達と活性化への働きかけ（1982）」，「障害児のための動作法－自閉する心を開く（1984）」など．現在，動作法は，教育現場においても実践され，それなりの評価をえるようになってきている．それと同時に，障害児教育の視点から動作法の限界について論じられたり，さらにはマイナスの評価までもなされている現実がある．その議論には，動作法そのものに対する議論，動作法をもちいているトレーナーの子供に対する係わりに関する議論，その両者を含めた動作法に対する無理解に関する議論など，種々の議論が整理されないままになされている．動作法に対する無理解による議論は，別として，上記のことについては整理しておく必要があると思われるので，本稿において検討していくことにする．

### 動作法の特徴

#### 1. 自閉症児に対する動作訓練

1980年3月やすらぎ荘研修キャンプの研修会で自閉症児に対する動作訓練（発達促進や教育のために障害児に対する動作訓練を適用することを指して，「障害児のための動作法（1984）」の出版以後，動作法というようになった）が話題にのぼり，研修会でこれについて取り扱われたことがある．当時は，自閉症児に対する動作訓練を適用すれば大きな効果がえられるといわれた頃であるので，初期の頃の様子が窺える．その研修会での成瀬（1980）の講義を筆者のメモから抜粋し下記に記すことにする．

動作訓練での臨床例を検討することによって事実の確認が大切である．動かない，表情がない精神分裂症の例では，腕上げ訓練を行うことによって，自省報告では，腕上げ訓練のあとは気分がよいという報告をする．行動観察では，自発的によく動くようになる，治療者との対人関係がよくなるということが見られる．神経症は，体が硬く，リラクセーション訓練を行うと症状が改善される．脳性まひ児では，体が動くようになると，表情や性格が改善され明るく活発になる．以上の事実により，心と体とは密接な関係があると推測できる．

自閉症児に対しては，遊戯療法，行動分析，行動療法などの治療法が適用され，自閉症を治療したり，あるいは，機械的な行動を学習させて症状の改善をはかっているが，現実には，それほど著

しい効果をあげているとはいえない。精神分析などは verbal なもの、イメージをもちいての治療である。それに対して、遊戯療法、サイコドラマ、森田療法などは、活動集団といわれ、体を動かすことが治療へとつながる。その意味で、体を動かすことがよいのであれば、もっと積極的に動作の問題として自閉症に対して動作訓練を実施しその効果をみるのもひとつの方法であるといえる。

自閉症児の動きについて見ると、ぎこちない体の動きが観察される。自分の動作をきちんと把握していないと思える事実がある。鏡を見て自分の動きを確認するという事実、これは自己認知といわれているが、自分の動きの再認知であるとも考えられる。したがって、動きの感覚を積極的に教えていく動作訓練をやってみる必要がある。

腕あげ訓練を自閉症児に行って効果を挙げている例をとりあげてみる。腕あげの意味としては、2つのことが考えられる。1) ゆっくり腕を挙げさせることで、自分の手の動きの感覚をつかむことができる。自分の体の動きを確認することを通して自分の体の動きを統制できる。つまり、動作感覚を獲得するのが腕上げ訓練の狙いとなっている。2) 腕上げ訓練をすることで体軸（体幹）を軸とした手の動きを捉えることができるようになる。体軸の形成するのが、腕あげとすれば、体軸の問題としては、腕上げのほかにも、さらによい方法がある。体の動きとしては、軸の定まらない体の動きと軸の定まった体の動きとがある。自閉症児の体の動きは軸が定まっていないので、その意味では、直立前傾姿勢をとらせるのがよい。というのも、直立前傾姿勢のひとつの大きな意味は体の軸をきちんとさせることにあるからである。さらに、身体運動の自己コントロールがうまくいかない自閉症児の場合は、立位での重心移動、Gパターンからの自己処理のための直立前傾姿勢を行う必要もある。

結論として、動作訓練が自閉症児に対して効果があるとすれば次のことがいえる。1) 心の活動性の幅が狭いと体が硬くなる。体の硬さをとることで心の活動の幅がひろがる。心と体は相互に依存関係にある。2) 心のもっと基礎的なものに体がある。人間関係ができていくのは体の動きを媒介にしてである。したがって、人間関係を作るには、自分の体の存在感（動作感覚）をきちんとつかむことが必要となる。経験的には、動作感覚を身に付けさせるには胸そらしがよい。体の動きを明確に捉えることによる、身体軸の形成、動作感覚の獲得、これを基礎にして対人関係を付けていくことができるようになる。感覚について述べれば、感覚としては、環境の物を受け取る感覚、いわゆる input としての感覚が一般に考えられているが、もうひとつ、環境に働きかける感覚、いわゆる output としての感覚がある。感覚訓練では input を重視するが、ゆるめる感じ、動かす感じ、これらもひとつの感覚である。その意味では、働きかける感覚、いわゆる動作感覚もひとつの感覚である。動作感覚は、動作自体が感覚として明確である、動きを通して受け取る感覚、自分の体を動かすことを通して獲得する感覚などの特徴をもっている。

精神分析 verbal でイメージなどをもちいるが、そのもっと基礎には体の感覚がある、その意味では、心の活動の基礎には体の活動がある。さらにいえば、心の存在のもっと基礎には体の存在があるといえる。随意筋との関係で体を動かす。そうすれば、自己の存在感が明確化してくる。自己治療という自己とは、体の動きを通して自己が明確になる、体の動きを操作することによって一層高いレベルの自己ができる、という意味での自己である。その意味で自己の存在感の基礎は体であるといえる。同じ体でも、そのレベルが異なる。手は知的なレベルのもの、外界に対する窓口であるが、胸そらしはもっと深い意味の体の存在感と関係している。立てば、軸ができ、重力との関係ができる。さらにいえば、赤ちゃんが母親に抱かれるというのは、基礎的な関係で、特定の人と結び付く元となるものである。その意味では、手で触る、手で触られる、この関係で力を入れたり抜いたりすることは重要である。ここでの動きは単なる動作のスキルとは違う。体の緊張が取れ動きが

よくなると心の活動が active になる。体とは人間の精神を揺り動かす基礎的なものである。

動作法へとつながる基本的な考え方は、この研修会ですでに示されているといえる。

## 2. 障害児に対する動作法

それ以後、成瀬 (1982a, 1982b, 1982c, 1984, 1985, 1986) は動作法について概説する論文を発表しているが、成瀬 (1985) の論文を引用することによって動作法の特徴を示すことにする。

成瀬 (1985) によれば、動作法は次のような特徴をもっているということになる。

「動作法というのは、トレニーである子どもにある特定の動作、すなわち課題動作をさせ、それが遂行できるように、治療者、またはトレーナーが援助する過程を通して訓練を進めるものである。……(課題動作として) 今日最も広く用いられるのは、「腕上げ」「軀幹ひねり」「胸・背そらせ」など単位動作と呼ばれるもので、「立位」「重心移動」「しゃがみ」など、姿勢維持に関するものも用いられる。

これらの課題は、自分の体の特定部位を自分でリラックスさせることと、所定の動きをみずから生起、推進、制御して、最後まで遂行することの二つが含まれ、その完遂があくまで求められ、その間、他の動きに変えたり、その場から逃避することは許されない。きわめて限定された範囲のわく組みの中で、彼は自発的、能動的に動作の遂行に努力することになる。……この方法は、体の持ち主である「自己」に働きかけるとともに、その自己が自発的、能動的に動作をして、自己にとって客体である自体に働きかけ、さらに、自己の側の自体を通して外的物理環境、および他者の意思とそのコミュニケーションに対応してみずから働きかけるといふ、二重の意味で子どもの自己活動を取り扱っている点に、最も大きな特色がある。

自己活動といっても、精神分析を中心とする心理療法のように、主観的・知的活動を非現実的レベルで扱うのではなく、また行動療法のように行動とパフォーマンスだけを問題にして、その主体者である自己の活動や心の動きを考慮しないようなやり方と比べて、全く新しいアプローチということになる。

ことに自己が常に自分の体という客体に対して、また外界の物理的環境、トレーナーという他者の意思に働きかけ、その正誤を問われ、修正を余儀なくされるなど、常にリアリティーというものに直面し、その対応を迫られながら課題を遂行しなければならないという点で、独自のものである。」

さらに、動作を介してのコミュニケーションの観点から、成瀬 (1985) は、当初は、他者と他体の認知に関して、自分の手の動きを規制し、強制するように働きかけている相手という人間がいるという認知には至らずに、「じゃまになる“この手”」という感じで対応しているという。自己にとって他体は自体に対して機械的・物理的に働きかける存在でしかないが、自己活動の拡大と共に、動作経験が豊富になるにつれ、他体の背後に実はもうひとつ別の存在、すなわち他者がいるということに気づくという。これは「自己活動が自己－自体－環境－他体－他者という系に対応するようになったことを意味する。そうすると、トレニーはトレーナーをもはや他体というような物体としてみるのではなく、トレーナーというひとに対応してさまざまな人間的活動をする。」ことばや視覚によるコミュニケーションより一層直接的で強いコミュニケーションが動作には存在する。「他体は自体に向けてのコミュニケーションをするだけでなく、自体との接触を通して自体と微妙な動きやさまざまな緊張の状況をキャッチし、あるいは自体に表現される自己の心の緊張や動きについて逐一情報を獲得する。」これは「ことばや視覚によるコミュニケーション・ループではできにくい動作法独自のもの」である。大野 (1984) は、「子どもの側に、手の感触によって把握できるところの操作可能な内的過程がある」、そして「手とからだの動きとの対話によってその内的

過程にはたらきかけ、それを子ども自らがコントロールするのを援助してやるのが、行動変容を引き起こすうえで重要な要因となっている感触があった」として、動作によるコミュニケーションの重要性を指摘している。

最後に効用について、成瀬（1985）は、効果第一主義でつくられたもので、「効果そのものが従来とは全く違ったレベルのもの」であり、「一週間の宿泊集団集中訓練で、三～四日目ぐらいまでにきわめて顕著な変化が見られ、落ち着いて、コミュニケーションもとりやすく、甘えたりするようにもなるなど、多くの効果が報告されている。」ということを挙げている。

### 動作法の意義と問題点

動作法が短期間に顕著な効果をあげていることは、大野（1984）の論文の中でも述べられている。確かに動作構造のもつ意味は上記のように大きなものである、と考えられ、大筋において筆者も納得のいくところである。成瀬（1985）も指摘するように、「行動としての自閉・多動は変わらないが、内面の心の動きは理解できるようになったなどという精神分析や、学習した行動はできるようになり、パフォーマンスは上がったとしながら、子ども自身がいかに変わったかを語れない行動療法と違って、この方法には、確かな当人の心、すなわち自己の活動の仕方の変化が見られる」のである。成瀬（1988）によれば、人間の行動は「それ自体ひとまとまりのある意味単位」である。意味抜きの行動をいくら測定しても、また行動を試行の関数として表現しても、行動はある条件を設定すれば機械的に対応したものが出現するというものでもない。この行動原理に基づいた行動療法に比べて、動作法は自己の活動の仕方を問題にし、さらに具体的な動作を基盤にしている点は非常に独自な方法であるといえる。しかしながら、体そのものの動きを対象とする動作という視点に伴う利点と同時にその限界もある。この視点から幾つか検討すべき具体的な問題もその一方ではある。一時的に顕著な効果が現われても、その後継続してその効果が現われていくのか、顕著な効果とは何か、動作によるコミュニケーションは対人とのコミュニケーションにおいてどのような役割をもっているのか、子どもたちが外界を取り入れ構成していくうえでどのような意味をもっているのかなどの問題がある。この点は、「一週間の宿泊集団集中訓練で、三～四日目ぐらいまでにきわめて顕著な変化が見られ」、「アイ・コンタクトができるという程度のことならその期間で十分だが、本当に大変なのは、そうなったあとの指導をどうするかだ」というある研究者のことばは、そのまま今後の問題を示しているといえよう。」という成瀬（1985）の指摘にも現われている。次にこの問題について検討していくことにする。

#### 1. 動作法そのものに内在する問題

前述のような効果や内容が動作法にあるとしても障害の重い子供の教育的視点からみれば多少困難を伴う問題がある。成瀬（1984）は、「自己にとっての客体であるからだを拘束し、動きを強制することが、当人の主体である自己という心の活動をより自由で能動的なものにしていく条件である」と考えている反面、成瀬（1986）は、「動作法は良きにつけ悪きにつけ、その特徴である動作というものが問題になる。それが有効だということは、同時にその強い影響力がマイナスにも作用しうるということを忘れてはならない。そして、このマスの面をいかに少なくしていけるかがおおきな鍵になると思われる」という判断をしている。直接的な身体接触を技法の中心に置く動作法では、生の感情が顕著に現われやすく、動作上の混乱や感情的な問題が顕在化しやすい。そのため、「相手の態度や感情の様態を見抜くと同時に、動作法を実施中に起こる自己の情動や感情の変

化を洞察し自己認知しそれをコントロールする術を身に付けておく必要がある」という指摘も成瀬（1985）によってなされている。いわゆる、心理療法という転移と同時に逆転移をも洞察する能力がトレーナーに要求されるということになる。

自閉症児の特徴と彼らに対する動作法のもつ意義として、成瀬（1963）によれば、「トレーニーの自閉する心は外界や他人に対して無視したり無関心でいられるような自由な状況におかれ、かつて気ままにふるまえるところからくるものと思われるが、それを妨げ、外界や他人からのほたらきかけに対応せざるを得ないような状況をつくるためには、ことばを含む他のどんな方法によるよりも、動作をとおすのが最も有効のように思える、自由かつてな彼の動きを拘束し、特定の彼なりの対応を迫る手段として、これ以上のものはないと思われるからである。」ということになる。成瀬（1985）は、外界や他人に対して無視、無関心である、周囲からの要求に応じない、自分だけの世界に閉じこもるといように自閉症児を特徴づけ、そこに動作法の利点を見つけ、「外界や他人からのほたらきかけに対応せざるを得ないような状況」をつくるために動作法がよいという。さらに、子供の体を拘束し一定の動作を強要することの意義について、成瀬（1985）は、「自己にとって客体であるからだを拘束し、動きを強制することが主体である自己という心の活動をより自由で能動的なものにしていく条件である」という。

しかしながら、障害の重い子供では、からだを拘束し、動きを強制すれば、子供の自発性をおさえ、ゆがめてしまったり、あるいは、対人関係における問題行動を引き出したりするということが起こりうる。いくら動作を獲得させ自己活動を促すといっても、動作関係もひとつの対人関係であるので、ゆがんだ対人関係をその状況にもちこめば、そのことが子供に学習されることになる。拘束されれば、その状況から逃れるためにあらゆる手段を使い、そこで行った行動が一般の対人関係まで般化し、対人関係を歪めてしまうことが起こる。したがって、噛みつく、つばをはく、つねるなどの行動が日常化することもありうる。この点は、前述のような動作法の中で起こってくる相手の態度や体のうごきを洞察し、また、その経過の中で起こる自己の感情や態度について気づき、対処していけば、問題が起こらないといえるかもしれないが、現実的な対応としては様々な困難を伴うことが多い。

成瀬（1985）は、「自己にとって客体であるからだを拘束し、動きを強制することが主体である自己という心の活動をより自由で能動的なものにしていく条件である」といっているが、拘束・強制というのではなく、そのような対応によって子ども自身の行動の方向づけが確立することができたため心の活動がより能動的になったためであると考えられる。そのような行動の方向づけが起こるためには、もちろん、その背後には選択性が起き、自発的に自己の行動を方向づけていく自己調整系が高次化したためであると考えられる。その意味では、拘束・強制からは子供の心の成長は望めないと思う。

## 2. 自閉症児の動作法的な理解と障害児に対する教育実践的な理解

障害児教育の中で混乱が起こっているのは、子供の示す状態をひとつの病気であるとみることである。自閉も医学的にみれば、ひとつの症状であり、病気であると考えられる。しかし、教育的にみれば、単なるひとつの状態にすぎない。したがって、なぜその状態が起こっているのかを理解し、その状況に対応することが必要となる。病気とみれば、どうしてもそれを治そうとすることになる。ある症状（自閉）にたいしてある治療法を用いたらその症状や問題行動などが改善されたという動作法の発想法は、自閉症児の状態をひとつの病気と捉え、その病気を治そうとする発想である。動作法には、外界（人や物）との関係でなぜそのような状態を示しているのか、という教育的な観点が欠けているといえる。

成瀬(1985)は、「自閉する心は外界や他人に対して無視したり無関心でいられるような自由な状況におかれ、かって気ままにふるまえるところからくるものと思われる」、「彼ら(自閉症児)はふだんの生活において、そのおかれた状況に関心をもつことが極めて薄弱である」、「状況にそぐわない行動をしたり、現実の場面を無視してかってなふるまいをする」、「周囲からの要求があってもそれに直面したり、それに立ち向かったりすることを避けて、自分だけの世界に閉じ込める」、などとして、自閉症児を特徴づけている。そこに動作法の意義を見つけたのは、前述した通りである。ここでは、「無視・無関心・かって気まま・逃避・閉じ込め」などという自閉という症状が存在するかのように記述されている。そのような自閉症児に対して、動作法を用いれば、効果があり、その効果は、動作を通して子供の自己活動、精神活動が活性化されるためであるといわれている。しかし、教育実践的な立場からみれば、「無視・無関心・閉じ込め」などという自閉的な行動は、なにも病気ではなく、人間の行動としての一時期の状態像である。その状態は人や物などの外界との関わり方によって起こってくるひとつの状態であるといえる。その意味では、それらは彼らに存在する内在的な特質としては考えられない。「無表情・無関心・無反応」というレッテルがはられる障害の重い子供であっても、彼らに即した関わり方をすればその子なりに外界と関わっていく。進(1985, 1988, 1989, 1990)の報告にもあるように、生き生きとした表情になり、積極的、能動的、課題的に外界に関わっていく。この事例から考えれば、子供の状態像というのは、その子と関わっているその関わり方の質として現われてくるといえる。自閉・多動といわれている子供に対して地道な教育実践的関わりを積み重ねれば、その子なりに信号・信号操作力も高まり、自閉の状況も改善され、日常生活における行動調整力が高次化していく。進(1989)も指摘するように、初期学習、概念行動形成の学習、記号操作の学習へと学習を積み重ねていくことが必要である。

### 3. 動作的コミュニケーションと信号系のコミュニケーション

動作法の特徴として、動作をもちいての対話、コミュニケーションが挙げられている。動作は、動作感覚は明確であるので、ことばや視覚によるコミュニケーションより一層密接なコミュニケーションの場を提供することになるという。成瀬(1985)は、「ことばや視覚による情報は身体接触と動作という直接的で強力なコミュニケーションからみれば、たとえ知的・認知的であるとしてもむしろ間接的・補助的な性格しかたぬ弱いものといえてよい。」と述べている。コミュニケーションをどのように定義するかにもよるが、人間は様々なコミュニケーションの形態をとっている。梅津(1977)は、「行動体制を規定する条件となるもの、行動体制に作用しうるもの」を信号と定義し、「行動体制と信号系活動」に関する独創的な学説を提唱している。梅津(1967)は、交信関係の立場から、「生活体  $O_1$  のある行動(運動、分泌、身体表面の色などの状態変化)が他の生活体  $O_2$  に(刺激となって)作用して  $O_2$  がたびたびある特定の型の行動を起こすことが認められるとき、両者は交信関係、または伝達関係にあるとするならば、ヒトにおいても、言語行動以外による交信関係があり」というように、コミュニケーションを定義している。個体内の信号の交信と個体間の信号の交信があり、個体間の交信がコミュニケーションといえる。個体Aが発信した信号を個体Bが受信し、個体Bの行動の発現、調整に関与した状態を指してコミュニケーションとしてみることができる。その意味では、個体が外界からの刺激をどう受け止めるかという受信(刺激受容)の様態と関係してくる。障害の重い子供の場合には、一概に身体接触と動作という直接的で強力なコミュニケーションが優れているとはいえない。身体接触と動作という直接的で強力なコミュニケーションであるが故に、行動の調整度を高めることもあるが逆に混乱を起こす可能性もあるといえる。身体接触であれば、どのような身体部位に対してどのような刺激をもちいれば、さらに、どのような触覚的関わりをすれば、彼らの行動の調整力が高まるのかということも細かに検討する必要がある。

動作によるコミュニケーションを通して行動の調整力が高まる子も確かにいるであろうが、そのような子供は本来ある程度の行動の調整力を有している子供である。

障害の重い子供は、そのような直接的なコミュニケーションよりも、間接的ともいえるようなもの、しかも我々の気づかない弱い刺激によって、行動が発現、調整される。発信の刺激としては、音であれば、響きのある音、紙のこする音などのような物がふれあう音を受信しやすい。音源としては、初期は背中、後ろ、足の下から刺激を受信しやすい。体の前面から刺激を受け入れるようになるのはその後のことである。進（1989）の報告にあるように、触覚的な刺激も背中、足の下、それから口へ、さらに手や目へと受容の様式が変化していく。障害の重い子供は手や目を最初から使わない。一定の学習をへて手や目を使用するようになる。手や目を使うようになれば、概念的行動や記号的行動が育ち、象徴信号や記号をもちいてコミュニケーションをおこなうようになる。自閉・多動な子供も詳細に観察すれば、手や目をあまり使わない子が多く、背中、足や口での触刺激を受信し、自己の行動を調整していることも多い。その意味では、初期学習を通して彼らにも概念的行動や記号的行動を育て、象徴信号や信号をもちいてのコミュニケーションを獲得させる必要がある。

#### 4. 自己調整系の形成

成瀬（1982c）は、動作法によって著しい変化が現われるのは、「主体的能動性を基盤とした外界の物理的環境および対人的・社会的環境とのコミュニケーションができるまでに、自己活動が高まると考えられる。」という。自己活動が高まるために、主体的能動性を基盤とした外界の物理的環境および対人的・社会的環境とのコミュニケーションができるようになったと考えているが、自己活動の高まりと外界の物理的環境および対人的・社会的環境とのコミュニケーションは、直接的な関係があるとは考えられない。動作を通しての自己活動は、自己の身体を対象とした自己活動である。同様に自己活動といっても、上記のように自己の身体活動を調整する自己活動もあるし、また、自己と外界との関係を調整する自己活動もある。この両者の自己活動は、自己調整系を通しておこなわれるものである。その意味では、自己調整系は自己の身体、あるいは、自己と外界の両者に対しておこなわれるものであるといえる。自己調整は動作という直接的な手段によっておこなわれることもあるが、様々なレベルの間接的な手段によって、初期の頃は触覚的な手段（触信号）によって、つまり、背中や口などの触刺激を通して、発達すると手の触覚や視覚を通して、実施される。さらに、発達すれば、言語や記号をもちいて、自己の行動を調整していくことになる。

成瀬のいう「外界の物理的環境および対人的・社会的環境とのコミュニケーション」は、上記の意味で動作を通しての自己活動が高まることによって即形成されるものではない。「外界の物理的環境および対人的・社会的環境とのコミュニケーション」は、外界の物理的環境および対人的・社会的環境と信号をもちいての自己活動とを調整する自己調整系を確立することによってえられると考える。したがって、ある動作の学習を通して確立される自己調整系は、その動作を支える自己活動を調整するものであるが、外界（人や物）とのコミュニケーションは、コミュニケーションを支える信号活動を豊富化し、それを行動と対応づけていく教育的な活動を通して可能になるのである。その意味では、短期間に著しい効果をえるようなものではないと考えられる。成瀬（1985）のいう、「一週間の宿泊集団集中訓練で、三～四日目ぐらいいままでにきわめて顕著な変化が見られ」、「アイ・コンタクトができるという程度のことならその期間で十分だが、本当に大変なのは、そうなったあとの指導をどうするかだ」というある研究者のことは、そのまま今後の問題を示していえよう」ということは、子供の自己活動を動作によって規定されているものとして考える結果として、そうならざるをえないといえる。自閉・多動といわれる子供たちの心理的活動、言語、認知などの



問題は、動作だけで解決できる問題ではなく、その活動を支えている信号系活動があるはずである。いわゆる自己と外界との関係（信号系活動）を通して形成される自己調整系がある。動作法をおこなったから、あることばがでた、アイ・コンタクトがとれるようになった、などとある心理活動が形成されたかのように考えられることがあるが、もしそのような活動が形成されたとすれば、その活動が形成されたのではなく、本来その子がもっていた潜在能力が動作という関係を通して顕在化されたものと考えられる。そのような心理的活動が形成されるためには、それなりの心理的活動が形成される道筋があるはずである。それをぬきにして、動作法をおこなえば、アイ・コンタクトがつく、ことばがでるということにはならない。その意味では、今後も動作の意義とその限界を教育的実践を通してさらに明確にしていく必要がある。

### 参考・引用文献

- 成瀬悟策 1980 やすらぎ荘研修キャンプ講義
- 成瀬悟策 1982a 動作・心・自己(1)―障害児への「動作訓練」適応―精神薄弱研究 288 90-97
- 成瀬悟策 1982b 動作・心・自己(2)―障害児への「動作訓練」適応―精神薄弱研究 290 80-87
- 成瀬悟策 1982c 動作・心・自己(3)―障害児への「動作訓練」適応―精神薄弱研究 291 82-89
- 成瀬悟策 1982 心理リハビリテーションの展開―精神の発達と活性化への働きかけ 心理リハビリテーション研究所
- 成瀬悟策 1984 動作法の心理 成瀬悟策編著 障害児のための動作法―自閉する心を開く 205-232 東京書籍
- 成瀬悟策 1985 動作法による治療教育の概説と効用・限界 実践障害児教育 139 26-27
- 成瀬悟策 1986 動作法のための理論的考察 リハビリテーション心理学研究 XIV 1-17
- 成瀬悟策 1988 自己コントロール法 誠信書房
- 大野清志 1984 動作法導入のいきさつ 成瀬悟策編著 障害児のための動作法―自閉する心を開く 36-60 東京書籍
- 進 一鷹 1985 重症心身障害幼児の触覚を通しての外界の受容と行動の自発 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要 15-22 第2号
- 進 一鷹 1988 ことばのない子供の言語行動の形成 熊本大学教育学部附属教育工学センター紀要 31-43 第5号
- 進 一鷹 1988 重症心身障害児の教育実践からみた外界の構成と姿勢の調節 熊本大学教育学部紀要 265-277 第37号 人文科学
- 進 一鷹 1989 人間行動の成り立ちからみた認知過程における触覚の役割 熊本大学教育実践研究 27-35 第6号
- 進 一鷹 1989 重複障害児教育における課題学習の意義とその役割に対する理論的考察 熊本大学教育学部紀要 197-208 第38号 人文科学
- 進 一鷹 1990 重度・重複障害児の自己調整と外界の構成 熊本大学教育実践研究 56-64 第7号
- 梅津八三 1967 言語行動の系譜 東京大学公開講座9 言語 49-82 東京大学出版会
- 梅津八三 1977 行動体制と信号系 重複障害研究所にて講演

(1990年5月21日 受理)